



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 58 回 日本語教育方法研究会

オンライン開催

2022 年 3 月 15 日(火)

第 58 回研究会は、新型コロナウイルス感染症の情勢を鑑みてオンライン開催といたします。

会長 河野俊之

TABLE 1 第 58 回研究会開催について

日 時	2022 年 3 月 15 日 (火)
会 場	オンライン
開催委員	中川健司 (事務局：横浜国立大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:30	全体会 (説明)	13:00	昼休み終了
10:00	ラウンド A 開始	13:00	ラウンド C 開始
11:00	ラウンド A 終了	14:00	ラウンド C 終了
11:10	ラウンド B 開始	14:10	ラウンド D 開始
12:10	ラウンド B 終了	15:10	ラウンド D 終了
	昼休み開始	15:20	全体会 (講評) + 交流会
		16:00	研究会終了

【参加方法】

第 58 回研究会では、運営上の都合により参加者の上限を 160 名といたします。参加するためには参加申込が必要です。以下のように、まず会員優先受付 (会員の参加申込のみ受け付ける) を行い、次に一般受付 (非会員の参加申込も受け付ける) を行います。

A. 会員優先受付 (2 月 7 日～21 日) → 終了しました。

B. 一般受付 (2 月 23 日～3 月 8 日) → 上限 50 名に達しましたので、受付を終了いたします (2022/03/04)。

なお、今回の研究会は会員、非会員いずれも当日参加はできませんので、ご注意ください。。

【プログラム】

発表課題の前の番号は、ラウンドごとの番号で、括弧内は全体の通し番号です。例えば「B03(21)」は、ラウンド B における発表番号は 03 で、全体の通し番号は 21 という意味です。研究会誌にはこの括弧内の通し番号の順番で掲載されています。なお、今回の研究会では口頭発表は行いません。

【午前の部】

●ラウンド A 10:00-11:00 (発表件数 18 件)

A01(1).複線径路等至性アプローチを用いた日本語教師の省察活動

稲田栄一 (立命館アジア太平洋大学)

本発表は、中国人日本語教師 1 名を対象に行った複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いた省察活動の概要と、その効果を報告するものである。活動の目的は、参加者の批判的省察を促し、教師オートノミーの促進へと繋げていくことである。そのために、人生を俯瞰的に振り返ることができる TEA の仕組みを援用した。本発表における省察活動とは、発表者と参加者が共同で TEM 図と呼ばれる人生の軌跡となるモデルを作成し、この図をもとに参加者が自身の過去を振り返るというものである。実践の結果、参加者は批判的省察の重要性が理解できたほか、自身の成長をメタ認知できるなどの効果があり、日本語教師の省察に TEA を用いることの意義が示された。

A02(2).日本語学校における文化体験オンラインツアーの取り組み ―ビジネス日本語コースでの実践―

宮本玲子 (元学校法人長沼スクール東京日本語学校)

コロナ禍の行動制限により、ビジネス日本語コースの学生を対象に文化体験オンライン授業を実施した。ガイドを交えた地域住民との交流を通じて、学生が単に文化や産業について学ぶだけでなく地域が抱える課題にも目を向け、何らかの気づきを得られるような双方向の授業を目指した。異分野の方との協働実践から多くの示唆を得ることができた。本稿は、2 回のオンライン文化体験ツアーの実践を報告し、双方がどのような気づきを得ることができたかを検証し、今後の授業の改善につなげることを試みるものである。

A03(3).語彙の意味理解と視覚・空間的知能との関係

シェキャラビ ゼイナブ・シルザド ガレルドカニ シェイダ (テヘラン大学)

漢字の組み合わせで作られる日本語の語彙学習は困難な作業である。しかしながら、人間の視覚・空間的知能が視覚言語である日本語の漢字語彙習得を促進すると考えられる。そこで、本研究では、ペルシア語話者日本語学習者を対象に、視覚・空間的知能のレベルと未知単語の意味の推測する能力との関係を検証した。被験者の視覚・空間的知能のレベルと単語の意味推測能力を調べるため、マッケンジーの知能テストと語彙テストを行った。スピアマン相関分析の結果、視覚・空間的知能のレベルと未知単語の意味の推測能力の間に正の相関関係が認められた。従って、視覚・空間的知能のレベルが高ければ未知単語の意味をより正しく推測できると言える。

A04(4).推量を表す陳述副詞の文頭と文末の語用的機能について

侯鵬図 (天津師範大学)

会話で使用される推量を表す陳述副詞の形式は、<文頭>に現れたり、<文中>に現れたり、<文末>に現れたり、統語上、比較的自由な位置での使用が観察される。特に、文頭と文末は、文中の機能と異なり、文の最初と文の最後に位置し、次に来る聞き手のターンに隣接しており、話し手と聞き手が互いに心的態度を示し合う場となるため、語用的機能ははっきりとした形で現れていると考えられる。本文は、アンケート調査により、文頭と文末に潜んでいる言語使用意識を明らかにし、語用的機能の振る舞いを考察した。

A05(5).様態ソウダの語用論的制約と名詞共起との関係について ―Twitter ではなぜ「いい車そうだ」のような表現が使われるのか―

宮口徹也（中部学院大学）

様態のソウダは名詞には接続しないとされるが、コーパスにおいては「いい人そうだ」のように、「形容詞＋名詞＋そうだ」の形式で名詞と共起する例が見られる。こうした事例では特に人の性質や様子を表す語が使用される傾向があるが、本稿ではなぜそうした傾向が見られるかということについて、それらの語の表す事態の性質と、「話し手が真と捉えている事態には使用できない」というソウダの語用論的制約との関係から考察する。また、Twitter では「いい車そうだ」のように、その傾向から外れる用例も散見されるが、なぜそのような表現がなされるについても Twitter でのやりとりの特徴とソウダの制約との関係から考える。

A06(6).初級非漢字圏学習者用の漢字ビデオ開発 ―修学スタート支援のために―

松野美海・金銀珠・山本いずみ・眞野道子（名古屋工業大学）

本稿では、名古屋工業大学留学生センターで開発した初級非漢字圏学習者用の漢字ビデオについて、開発の目的とパイロット調査およびその結果、完成ビデオの構成と特徴、今後の課題について報告した。開発ビデオは「実用性」を優先し、渡日して「すぐに使える」漢字を学習対象としている。また、従来の辞書型とは違い、絵を最初に大きく出し、絵の視覚的イメージと漢字の意味の認知との結び付けを図る「美術館型」を提案している点が特徴的である。「美術館型」の場合、抽象的な概念を視覚化することには限界があり、この点をどのように克服するかが今後の課題である。

A07(7).初級日本語作文コースでのブログを通したオンライン交流

市村佳子（テンブル大学ジャパンキャンパス）

本稿は、オンラインの初級日本語作文コースでのブログを通した外国人学生と日本人学生の交流の実践報告である。コロナ禍で人との交流の機会が減る中、書く機会を増やすこととコース内外の交流のためブログを取り入れた。学習者はブログで自分を表現し、クラスメートのことを理解し、日本人学生の参加者とコメントのやり取りを通じてコミュニケーションを取ることができた。また活動を通して書く力が伸びたと感じていた。日本人学生も外国人学生の文化や日本語学習について知ることができ、学びと発見があった。

A08(8). 条件表現「たら」を含む文の使用意識 ―インドネシア人日本語学習者を対象として―

藤村春菜（聖心女子大学大学院生）

本稿の目的は、条件表現「たら」を含む文について、学習者の使用意識を明らかにすることである。そこで、インドネシア人日本語学習者を対象とした文法性判断テストとインタビューを実施した。その結果、学習者は「もし」を仮定条件かどうかに関係なく使用している傾向があることが分かった。さらに、依頼・許可求め・提案などの相手に働きかける表現の混同を見分けることが学習者にとって困難であることが明らかになった。今後は日本語母語話者とさらに多くのインドネシア人日本語学習者にも調査対象を広げて、分析を進めたい。

A09(9).オンライン授業におけるグループ発表の試み ―発展的評価による科目改善と再評価―

数野恵理（立教大学）

本稿は発展的評価による科目改善とその再評価の有用性を提言するものである。初年次の正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズの科目のうち、発表スキルの習得を目指す科目を評価した結果、科目目標は概ね達成できており、今後は協働する力の養成も目指して、グループ発表を取り入れることになった。計画後、コロナ禍でオンライン授業となったが、オンラインでグループ発表を行い、科目改善を試みた。アン

ケート調査により科目を再評価した結果、学生はグループ発表ならではの困難を感じつつもそれぞれ工夫して対処していること、発表準備において協働し、学びが深まっていることが確認できた。

A10(10).オンライン型地域交流活動における課題と可能性 ―秋田の「食」を発信する2種類のイベントの実践を通して―

蔭山日菜子・橋口萌乃・佐藤萌花・神田彩乃・佐藤真琴（国際教養大学大学院）

コロナ禍において、留学生の入国制限や感染拡大防止等の理由により、対面での地域交流体験の機会が失われ、オンラインに活動の場を移行せざるを得なくなった。本稿では、国際教養大学の学生が国内外の参加者に向けて実施した、秋田の「食」に関する2種類のオンライン型地域交流活動（オンライン型・オンライン中継型）の実践について報告し、振り返りをもとに改善策を提示する。参与観察から、オンラインでの活動はICT面等の課題はあるものの、参加者と地域の人々が「活発なインターアクション」をすることによって、双方にとって満足感のある地域交流への可能性が広がることが明らかとなった。

A11(11).動画を用いたプロジェクト型学習の言語教育的および異文化教育的效果 ―日本語学校における「日本に住む留学生の生活」動画制作・発信活動から―

森岡千廣（相愛大学）・北野朋子（関西大学）・蔵本成美（別府溝部学園短期大学）・伊藤萌夏（大阪大学大学院生）

グローバル化が進む日本だが、日本語学校に通う留学生の中には、日本人との接点をほとんど持たない学生も多い。そこで、プロジェクト型学習（PBL）の方法論に沿い、留学生に自分の生活を紹介する動画を制作させ、日本人に観てもらいフィードバックをもらうという活動をした。その結果、言語教育的な学び（協働学習による学び合い、動機付けの上昇、動画制作という特性から発音に注意を向けるようになったこと）を促すと同時に、異文化教育的な効果（留学生は日本人に対する心理的距離が縮まり、動画を視聴した日本人も留学生の実情を知ったことで、コミュニケーションを取りたいという気持ちが強まったこと）を実感することができた。

A12(12).地方の活動歴の長いボランティア団体向け研修会の課題

高橋志野（愛媛大学）・向井留実子（元東京大学）・築地伸美（愛媛大学）

長く活動してきたボランティア団体は、新しい考え方を取り入れようと勉強会や研修会をおこなっているが、なかなか先進的な活動を取り入れることが難しいという実態がある。筆者は、そのようなボランティア団体の研修会で、近年の日本語教育の動向を紹介した。研修会後行った受講者へのインタビューから、新たな動向をボランティア団体の活動に取り込んでいくため、研修会のあり方を考察した。その結果、研修者は、受講者の既有知識である、現場の知識を把握して、その知識から理念につなげる、ボトムアップのやり方を行うことが適切であることが確認された。

A13(13).理工系大学院留学生の研究室会話における丁寧さの選択―人間関係構築を支援する会話教育に向けて―

生天目知美（東京海洋大学）・居關友里子（国立国語研究所）

本研究は、理工系大学院留学生4名を対象に、研究室メンバーとの関係性に応じて選択している丁寧さとそれを選択している理由について、アンケート調査とインタビューを行った。その結果、一部上下関係の規範が意識されているが、主に相手との親密度を基準に丁寧さが判断されていることが分かった。特に普通体の選択については、普通体を使うに相応しい親密度、相手からの働きかけや反応、相手を感じる可能性のある不快感等を考慮して慎重に判断されていた。親しい人間関係構築を支援する会話教育においては普通体の

会話指導が注目されることが多いが、丁寧体を基調としつつ親しさを表現する会話方法を指導項目として取り扱う必要性が示唆された。

A14(14).同一の学習目標に向けた日本語レベル別支援—介護の技能実習評価試験合格に向けた実践から—
岡田朋美・栃木亜寿香・滝島由紀（所属なし）・中野玲子（日本語みらいラボ）

本稿では、介護の技能実習生中国人 20 名に対して実施した実践報告を行う。ここでは、教育・研修の視点として、鈴木（2008）の「入口」と「出口」を取り入れた。支援では、N4 クラスと N2/3 クラスとわけており、日本語のレベルは異なったが、学習目標としては、「技能実習評価試験の合格」という共通の「出口」が設定されていた。授業は、集合型（インプット）と少人数型（アウトプット）を組み合わせで行った。授業例から、レベル別クラスで教師側がどのような工夫を授業に加えたのか、学習者側にどのような成果があったのかといった事例を基に考察を行った。また、レベル別にまとめ、今後の課題を明らかにした。

A15(15).視覚に障害がある日本語学習者にとっての「手書き」の意義 —学習者自身が感じる困難さと書字の関わりに関する一考察—

河住有希子（日本工業大学）・中西溪（社会福祉法人桜雲会）・藤田恵（立教大学）

本研究の目的は、視覚に障害がある日本語学習者にとっての「手書き」の意義を考察することである。2 名の学習者に対して、専門教育課程を学ぶ上での困難さに関する調査を行ったところ、挙げられた課題はいずれも「手で文字を書く」時間を増やすことで改善が見込まれるものであった。晴眼の日本語教師が必ずしも点字に習熟しているわけではないことから、視覚に障害がある学習者の学習は口頭でのコミュニケーションと、音声入力等を活用したデジタル文書でのやり取りが選ばれやすい。しかし、今後は意識的に「手で文字を書く」時間を増やすことが必要である。

A16(16).より深い討議・学びを目指した「ケースメソッド」とは—経営能力の育成を目指す慶應型ケースメソッドとの比較から—

アドゥアヨム・アヘゴ希佳子（宝塚大学）・鈴木綾乃（横浜市立大学）

ケースメソッドとは、ケース教材をもとに、参加者相互に討議することで学ばせる授業方法である。日本語教育におけるケースメソッドに関連する 11 の文献について、10 のカテゴリーそれぞれに該当する記述を抽出した上で、経営能力の育成を目指す慶應型ケースメソッドと比較し、分析した。その結果、より深い討議・学びのために以下の 4 点が提案された。1) ケースの解釈に留まらず、ケースを超えた自己モデルの更新を目指す。2) ケースの記述を詳細にし、討議時間も長くする。3) 参加者の情報を共有し、ケースメソッドの理念・注意点について入念に説明する。4) 綿密に準備しておいた効果的な発問を投げかける。

A17(17).在学生と入学予定者に対する外国人職員のサポート—学習意欲の向上と留学へのモチベーション維持—

久野かおる（東京福祉大学）

東京福祉大学名古屋キャンパスでは、入学課、総務課、教務課に外国人職員（ネパール、ベトナム、ミャンマー、中国）が正規職員として勤務し、日本人教職員とともに留学生のサポートをしている。教務課職員の場合は専任教員とともにクラスを担当し、学習、生活、進路指導など情報共有しながら学生指導を行っている。外国人職員は、日本人教職員にとって心強く、何より留学生にとって心の支えとなっている。そこで、本学名古屋キャンパス教務課外国人職員のサポートと外国人職員がどのようなサポートをしたら、学生の学習意欲を向上し、渡日前の入学予定者のモチベーションを維持できるか、外国人職員と学生へのアンケート調査を基に報告する。

A18(18).再構築シートを使用した文法学習—英語トラックの留学生に向けた効率的学習法の試み—

草刈明美（会津大学）

本研究は、読解教材と「再構築シート」を用いた文法学習法について報告するものである。少人数で断続的にしか日本語を学習できない英語トラックの留学生にとって、直接法による帰納的な学習は不向きである。そこで、「英語」が教師の説明やクラスメートの助けを担う日本語・英語混合の「再構築シート」を作成し、機能語などの文法学習項目に焦点を当てた自律的な学習法として採用した。事前テスト、事後テスト（3週間後）、遅延テスト①（6週間後）、遅延テスト②（12週間後）の結果から、この学習法には一定の効果があったと結論づけた。

●ラウンド B 11:10-12:10（発表件数 18 件）

B01(19).オンライン授業における学習者の発話機会の提供に関する提案—Flipgrid を活用したディスカッション練習を通して—

佐藤蘭礼（東京国際大学）・武田雅史（フリーランス）

コロナ禍によるオンライン授業への移行に伴い、学習者の発話機会の確保がこれまでにない重要な課題となっている。この実践では発話機会の確保を目的として、中級日本語のオンデマンド授業で動画提出によるディスカッション練習を行った。学習者各々が意見を録画し共有する課題と日本語母語話者との意見交換を録画する課題からなるディスカッション練習の機会を提供することで、個々の発話練習の機会を確保することができたと考える。今後は対面授業において、いかに応用できるかを模索したい。

B02(20).ベトナム人のブリッジ SE・IT コミュニケーター向けの日本語教育実践

レー ビック ジエップ（筑波大学大学院生）

本研究では、ベトナム人のブリッジ SE と IT コミュニケーター向けの日本語研修実践を行い、IT 人材の日本語育成について探ることを目的とする。事前調査から、受講生は日本語運用能力のみならず、コミュニケーション上の伝達力、説明力などに関わる問題もあると分かった。中級・中上級という学習対象に対して、IT 日本語とビジネスの基礎力を中心に学習内容を工夫した。また、オンライン形式で反転授業及び協働言語学習を試み、受講生の自律学習とインターアクション能力の向上に繋がると考えられる。受講生から良い評価を得られ、今後のコースデザインと指導方法を考える際には手がかりになると思われる。

B03(21).JLEM：オンラインでのポスター発表形式改善の試み

中川健司・河野俊之（横浜国立大学）

コロナ禍のため 2020 年半ばからは日本語教育関連の多くの学会・研究会がオンラインで開催されるようになった。非同期型でポスター発表を行う学会が多い中、日本語教育方法研究会（JLEM、以下本研究会）ではポスター発表を同期型で行っている。ポスター発表には、内容の把握の容易さ、活発な議論につながりやすい、発表の柔軟さなどの特徴があり、本研究会では、どのようにすればこのような特徴をオンラインでも活かせるか模索してきた。本稿では、本研究会がどのようにしてオンラインでの発表形式および運営方法を検討し、改善を行ったかについて報告する。

B04(22).視聴覚教材を用いた先行オーガナイザーの効果に関する実証的研究

王睿琪（東京外国語大学）

先行オーガナイザ（AO）は、新しいスキーマを作り出し、既有知識を賦活し、学習材料の保持を促進する働きを持つものである。しかし、読解授業において視聴覚教材を用いた AO の実践的研究はほとんど見られなかった。本研究は、新聞記事を教材とする読解授業を研究対象とし、視聴覚教材を用いた AO の効果について

て、実践的授業を行った。その結果、読解力向上、学習材料の理解・AOの保持・連想の促進、および学習意欲の保持に効果があることが明らかになった。これらの結果を通して、読解授業における視聴覚教材を用いたAOの利用の有効性が示唆された。

B05(23).「できたこと」の振り返りを日本語学習者はどのように認識したのか ―中国・広東省の高等教育機関での実践と質問紙調査の自由記述の分析から―

末松大貴（名古屋大学大学院生）

本研究は、学習や生活についてのポジティブな側面のみに焦点を当てた振り返りである「できたこと」の振り返りについて、日本語学習者がどのように評価していたかを示すものである。筆者は、中国のある大学での日本語の作文クラスのなかで「できたこと」の振り返りを実施し、その後、活動についての質問紙調査を行った。その結果、70%の生徒が「できたこと」の振り返りに対して肯定的な反応を示し、その主な理由は《学習者の精神面への正の影響》であった。さらに、「できたこと」の振り返りのより重要な要素は「ピア」、つまり「できたこと」の振り返りを協働で行うことであることが示唆された。

B06(24).ディベートを取り入れた中級前半「総合日本語」教材の開発

根本愛子・ボイクマン総子(東京大学)

本発表では、ディベートを取り入れた中級前半レベル対象の総合日本語科目向け教材の開発について報告する。形式を即興型ディベートとし、レベルに合わせたトピックの選定、複数名でのスピーカーの分担、相談時間の設定、相手側スピーチ中の質問(Point of Information)の廃止および質問・反論ターンの設定、ジャッジ(審判員)の廃止などの工夫をすることで、初級終了直後でもディベートを取り入れることは可能であり、また、一定の効果も期待できることがわかった。

B07(25).ビジネス日本語教育のための議事録作成教材の開発

向山陽子・村野節子・山辺真理子（武蔵野大学）

本研究はビジネス日本語教育のための議事録作成練習用の音声教材を開発することを目的とする。試作版教材を用いて院生と学部生を対象にして2回の実践を行い、タスクの難易度を尋ねるアンケート調査を実施した。その結果、次のことが問題点として明らかになった。1) 発話スピードが速い。2) 知らない語やカタカナ語の聞き取り、文字化が難しい。3) 聞き取りながらキーワードをメモするのは難しい。これらのことから、対象とする学習者を絞った上で使用する語彙を検討すること、議事録作成に必要な能力養成のためのタスクを工夫することが必要であることが示唆された。

B08(26).Web ページ作成による「読み手」を意識するリサーチライティング ―学習者へのアンケート調査による効果検証―

今城淳（山梨学院大学）

本稿では、大学の中級日本語コースにおけるWeb ページ作成による「読み手」を意識するリサーチライティングプロジェクト実践の紹介と、プロジェクトを通じたリサーチライティング力と日本語力の伸長についてどのように学習者自身は認識しているかの12名のアンケート結果を述べる。アンケート結果から、学習者はリサーチライティング力も日本語力も伸びたと認識しており、この実践により、学習の修得体験・成功体験を感じさせることができたといえる。しかし、実践を通して、著作権や剽窃への意識のさらなる必要性や、受動的学習を期待する学習者への対応などの課題も見られた。

B09(27).アカデミック・ライティング初心者のためのピア・レスポンス—感情面での困難への方略として—
小森万里（大阪大学）

本研究では、学習者がアカデミック・ライティングの過程で自身の感情を制御し自らをレポートや論文の完成に方向づけていくために他者との協力が方略の一つになるのではないかと考え、ピア・レスポンスを取り入れたライティング指導を行った。学期終了時に本実践に参加した学習者に対するアンケート調査を行ったところ、AW 初心者にとって、レポート作成は大きな不安とともに自信のなさや難しさ等マイナス感情を経験するものであるが、他者との協力を通じて、授業が役に立つと感じ、楽しい気持ちを維持できることや、レポートを書き進めることについての自信を得ていくようになることがわかった。

B10(28).CEJC コーパスに現れるばかりし用法の「なんとか」の予備的分析

石山友之（国際交流基金日本語国際センター）

本研究では対象を不完全に言語化する際に使用されるばかりし用法の「なんとか」について、予備的分析として、『日本語日常会話コーパス』をもとに機能の分類と会話における効果の分析を試みた。コーパスの用例から、機能を(1)曖昧な箇所を示す機能、(2)内容を省略していることを示す、(3)変数として用いるという3つに分類した。また、曖昧な箇所を示す機能は会話を継続する機会を創出する効果があり、日本語学習者にとって、発話産出に問題があったとしても、そこでやりとりを止めずに続けていくための有益なストラテジーと言えることを述べた。

B11(29).孤立環境における中国大学日本語専攻教育の現状と課題 —江西省所在のG大学—

郭躋（贛南師範大学）

日本語学習環境に関して、中国は一見して「孤立環境」とは呼べないが、実際のところ、地域によってかなりの格差がある。本稿は中国の「孤立環境」にあたる地域の日本語学習環境に注目し、その現状と課題を明らかにするため、日常的に日本語との接触の少ない環境である中国内陸部のG大学日本語専攻の学生を対象にアンケート調査を実施し、結果の考察を行った。調査の結果、G大学の学生は学習意欲があるものの、実際の学習実態が将来の日本語使用との間にずれが見られた。

B12(30).腹が立った出来事の語りにみられるストラテジー—女性話者が用いる「おまえ」について—

酒井香星（愛知淑徳大学大学院生）

本研究では過去の腹が立った出来事を語る際に女性が使用する呼称に注目し、どのようなストラテジーが用いられているかについて研究する。調査の結果、女性はその場にいない人物に対して「おまえ」を用いる。そして「おまえ」を用いる際は上下関係や親疎関係に関わらず使用できることがわかった。また、基本的な文体から逸脱し「おまえ」を用いることで怒りの感情を表そうとし、引用のマーカ―や笑いを伴って「おまえ」の使用が基本の文体でないことを示すことがわかった。

B13(31).大学の日本語教員養成課程における日本語教育実習の特徴 —テキストマイニングからわかるシラバス分析—

井元麻美（京都外国語大学大学院生）

本研究の目的は、大学の日本語教員養成課程にある日本語教育実習に着目し、シラバスの到達目標と概要を基にしたデータベースとKH Coderを用いて、どのような実習が行われているのかを明らかにする。その結果、到達目標も概要も①日本語が教えられるようになること、②教えるために教案と教材が作成できることがどの大学でも共通していた。また、到達目標では、教室活動、問題解決、振り返って改善できる、海外との交流などが一部の大学の特徴となっている。概要では、教室活動を考えること、教師・教育現場や日本

語教育について理解を深めること、日本語教員養成で学んできたことをいかし行う実習であることが一部の特徴であることがわかった。

B14(32).学習者は何をリソースとして課題に取り組んだか ―同期型遠隔授業と対面授業の事例を比較して―
斉藤紀子（神奈川大学）

筆者は大学学部留学生対象の聴解口頭表現の同内容の授業を1つは同期型の遠隔で、もう1つは対面の形態で実施した。授業支援ツールは同じものを使用した。遠隔はZoomの会議室で、対面はCALL教室で行った。比較の結果、課題の成績において、2つのクラスの間で大きな差は見られなかった。本発表では、2つのクラスで学習者が課題への取り組みや授業の理解においてどのようなリソースを拠り所として取り組んだかについてのアンケートの結果を報告する。アンケートからは遠隔の学生は教師の説明や授業内で得られる情報に、より集中して情報を得ているのに対し、対面の学生はクラスメートからも多くの手がかりを得ていることが明らかになった。

B15(33).医療現場における日本語の痛み表現 ―日本人と中国人の使用実態―
冷爽（聖心女子大学大学院生）

本稿では、パイロット調査の結果から、日本人と日本在住の中国人の痛みを表すオノマトペと比喻表現の使用実態にどのような傾向があるかを述べる。調査結果から、日本在住の上級レベルの学習者でも、オノマトペが理解できていないことが分かった。さらに、日本人と中国人の痛みの比喻表現は多少ずれがあるため、中国人が日本語で書いた比喻表現が日本人に理解できるか、という調査も必要である。最後に、日本人も中国人も理解できる比喻表現を集め、オノマトペとの対応リストを作りたい。

B16(34).地域日本語教室における講師勉強会の実践報告 ―秋田市日本語教室（オンライン）の例―
古田梨乃・平田友香・宮淑（国際教養大学）

地域の日本語教室である秋田市日本語教室のオンライン講師勉強会について報告する。勉強会では、講師同士がよりよい関係を築くための活動を行ったり、オンライン授業での悩みや困っていること、各々が工夫していることなどについて議論したりした。7回の勉強会を実施したところ、指導方法や教材についての知識が豊かになるとともに、講師らは生活者としての学習者をいかに支援するか、より積極的に考えることができるようになった。また、教室を主催する秋田市との連携が深まり、協働での教室運営が可能となった。今後もオンラインの利便性を活かし、このような勉強会を続けていきたい。

B17(35).中国人初級日本語学習者の作文における接続詞の習得について
夏逸慧（広州工商学院）

本研究では、中国語日本語学習者の文章力を向上させるために、4ヶ月間の作文授業における接続詞の使用実態について明らかにすることを目的とする。調査データとしては、広州工商学院の日本語専攻2年生（141名）の作文と授業評価を用いる。その結果、学習歴が長くなるにつれて、学生の接続詞のバリエーションは豊富になる傾向があり、作文課題に取り組むうちに学生は列挙や順序・順番などを示す接続詞を効果的に使えるようになることを指摘する。

B18(36).タイ人高校生を対象とした日本語学習意欲に関する意識調査
大竹春菜（筑波大学大学院生）

本発表の目的は、タイ人高校生の日本語学習意欲とそれに影響を与える要因について明らかにすることである。440名（14校）を対象とした質問紙調査の結果、約8割が高意欲群、約2割が低意欲群に分類され、

高い意欲を持っている学習者の方が多いことが明らかになった。因子分析の結果、「日本語習得への興味・価値認識」「上達への期待と実感」「教師の授業スタイル」「低負担」という4因子が抽出された。重回帰分析の結果から、とりわけ「日本語習得への興味・価値認識」が学習意欲の高さに大きく影響を与える因子であることが示唆された。

【午後の部】

●ラウンドC 13:00-14:00（発表件数18件）

C01(37).副専攻で日本語を学ぶ「優れた学習者」の学習ストラテジーの考察—SILLを用いた調査分析—

吉崎奈々（大手前大学）

副専攻における「優れた学習者」の学習ストラテジーの特徴を分析した結果、「認知」と「補償」で中上級レベルの日本語学習者と類似する点が見られた。少ない時間の中で日本語を習得するための有効なストラテジーとして、鍵を握るものと考えられる。「補償」では「具体的な取り組み」、「メタ認知」では、それに向けた「計画」、「認知」では「コミットメントした学習」、これらが適切に組み合わさり使用されることが、「優れた学習者」の有効的工夫と推察される。

C02(38).オンラインイベント「日本語教師の管理運営業務について話してみよう！」の企画・実施と今後の展望

浦由実（アン・ランゲージ・スクール）・平山允子（日本学生支援機構）・中川健司（横浜国立大学）

どのような日本語教育の現場においても、教育活動を支える管理運営業務が存在するが、機関を越えた情報共有や議論がなされることはほとんどなく、他機関の事例から業務改善のヒントを得ることが難しいのが現状である。そこで、筆者らは、日本語教師が担う管理運営業務についての情報共有や議論の場を作ることが目的に、2021年8月と12月にオンラインイベントを開催した。8月のイベントは、管理運営業務全般について参加者が俯瞰・議論する場とした。12月のイベントでは、日本語学校2校からの進学指導の事例発表を中心に据えた。事後アンケートから、日本語教師が所属機関を越えて管理運営業務について話し合う場の有用性が示唆された。

C03(39).工学系の論文における原因・理由を表す接続表現の「から」の使用

内藤真理子（電気通信大学）

日本語学習者を対象としたアカデミック・ライティングの教科書においては、原因・理由を表す接続表現の「から」は話ことばであるため、レポートや論文を書く際には「ため」に置き換えるとの説明が記述されているものが多い。しかし、向坂(2021a, 2021b)が指摘しているように、学術論文においても原因・理由を表す「から」の使用数は少なくない。本研究では、工学系の査読論文から「から」と「ため」が使用されている文を抽出し、その出現位置や、前件と後件の内容から、「から」と「ため」がどう使い分けられているかを分析し、アカデミック・ライティングの授業への提案を行った。

C04(40).「初年次教育レポートの書き方」のための教材開発—学生の授業評価アンケートから見えてきた課題—

築地伸美・菅野真紀子・梶川千文・林智子（松山大学）

筆者らは、初年次教育のレポートの書き方の授業で、学生にレポートの提出を課している。また、そのレポートの評価は、ループブックを利用し、授業で学習した内容が反映されているかどうかで行っている。授業終了時に、教材等の改善を目的とし、全受講学生を対象に記述式アンケート調査を行った。その結果、「見本になる教材」「タスクを通して学ぶ教材」等、具体性が高いものへの評価が高いことがわかった。一方、難

しかった点として、特に「資料選び」「引用の取り込み方」が挙げた。「資料」「引用」は現教材でも取り上げているが、レポート作成の実践につながるよう、段階を踏んだ具体的な教材を考える必要がある。

C05(41).ベトナム人介護福祉士国家試験合格者の読解過程 —漢越語非学習者を対象としたケーススタディー—
比留間洋一（静岡大学）・ファン ティ ミー ロアン（大阪大学）・道上史絵（津山工業高等専門学校）

本研究では、ベトナム人介護福祉士国家試験合格者のうち、漢越語非学習者1名を対象として、その読解過程にどのような特徴があるかを明らかにしようと試みた。調査の結果、漢越語非学習者の場合、漢越語学習者に比べ、漢越語を利用した語意推測ができない等、介護福祉士国家試験の問題の文章を正確に理解することが困難であることが確認できた。また読解過程調査により、漢越語を積極的に利用しない場合であっても、母語であるベトナム語の中の漢越語の影響を全く受けないわけではないことも明らかとなった。

C06(42).レベル差を超えたインクルーシブなオンライン型日本語交流コミュニティを目指して —会話テーブルと文化イベントの実践から—

佐藤真琴・神田彩乃・佐藤萌花（国際教養大学大学院）・橋口萌乃（国際教養大学）・蔭山日菜子（国際教養大学大学院）

国際教養大学では、学生主体の授業外活動として、オンライン日本語会話テーブルと文化イベントを開催している。参加者の日本語レベルは初級レベルからネイティブレベルまで幅広い。そのような状況下で、どのレベルの参加者でも参加しやすいインクルーシブな活動が行えるよう配慮を試みてきた。本稿では、それらの配慮を「参加者の理解を助けるための工夫」と「参加者がより積極的に参加しやすい活動デザイン」の2点に分けて分析する。そこで浮かび上がってきた課題について述べるとともに、参与観察や参加者へのアンケートを振り返り、今後の活動への改善策を提示する。

C07(43).コーパスを用いた「行く／来る」の「非空間移動」用法に関する一考察 —「名詞＋に行く／来る」を中心に—

薛安捷（筑波大学大学院）・パク オリガ ディミトリエフナ（筑波大学大学院）

日本語の動詞「行く」と「来る」の意味の多様性は、日本語学習者にとっては習得されにくいと言われている（Heo & Ogawa, 2016）。そこで、本稿は名詞句の共起状況に応じて「行く」と「来る」の使用法を明確に区別するために、『筑波ウェブコーパス』における「非空間移動」用法の動詞の「行く」と「来る」のコロケーションを考察した。その結果、＜抽象場所＞の名詞が「行く／来る」との共起は「場所」の抽象度・人の主観的認識に関わり、＜身体＞の共起名詞は「来る」と付与し、慣用される傾向があることがわかった。

C08(44).学術論文における引用表現としての「ように」の使用環境

向井留実子（元東京大学）・中村かおり（拓殖大学）・近藤裕子（山梨学院大学）

引用を伴う「ように」は、これまで引用表現として扱われていなかったが、主張などを補強をする機能があり、引用表現として指導すべきものと考えられる。本研究では、指導の手がかりを得るため、学術論文35編を調査し、引用を伴う「ように」の使用回数や使用環境を明らかにした。その結果、40箇所用いられており、前件が情報源のみ示し、後件が要約になっているパターンが20箇所、前件で、主に直接引用を用い、後件が前件の引用を踏まえた帰結になるパターンが16箇所あった。このように、パターンによって用い方に違いがあるため、初年次の学生には、理解しやすい前者から指導することが適切と思われる。

C09(45).大学院生の研究室におけるコミュニケーション—研究室の特性を利用したやり取りに着目して—
居關友里子（国立国語研究所）・生天目知美（東京海洋大学）

本研究では、大学院で学ぶ留学生が研究室でのコミュニケーションを円滑に行うために有用な情報を得ることを目的に、理工系研究室における相互行為の分析を行った。ここから、日本人大大学院生は研究室の中で明確な始まりや終わりを持たず、長い沈黙を多く含む形での緩やかな会話を多く行っていることが明らかになった。会話を長くなめらかに続けることだけではなく、このような会話のバリエーションを理解し実践することは、研究室で活動する留学生が他のメンバーとの関係を構築することに貢献し得ると考えられる。

C10(46).台湾の成人日本語学習者を対象とした学習者主体の読解活動の可能性
永富菜穂美（東呉大学大学院生）

本実践は教師主導の授業に慣れている台湾の成人日本語学習者の教室で、学習者主体の読解活動を行ったものである。彼らがこの活動をどのように捉えたのか分析し、活動としての可能性を考察した。彼らはこの活動に一定の意義を感じ、肯定的に捉えていることが明らかになった。同時に、教師主導の時間的効性や学習者同士のやり取りの困難さから、学習者主体のメリットと教師主導のメリットとの間で葛藤を感じていることもわかった。

C11(47).共通選択科目としての日本語教育及び第二外国語としての日本語教育における相違点と課題—履修動機を手がかりに—
崔成子・蘭卉・曾曾（ハルビン工程大学）

本研究は、共通選択科目の日本語授業「初級日本語」に着目し、学習者の履修動機を調べた上、第二外国語の日本語授業と比較し、学習動機に関する相違点を明らかにした。「初級日本語」を履修した学生には文化志向、教養・能力向上志向と単位志向といった動機が最も多く見られる一方、「第二外国語（日本語）」を履修した学生は文化志向、成績志向とキャリア志向といった動機が多い。履修動機は異なることにより、「初級日本語」の場合、より日本文化や教養知識を取り入れ、履修学生のニーズに合わせたコースデザインが望まれる。

C12(48).現代日本語の助詞「たり」の非例示用法の使用頻度と世代差 —『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を用いて—
陳玉（神戸大学大学院生）

現代日本語の助詞「たり」は文中に挙げられた要素以外に、ほかの要素も暗示する「例示用法」と、ほかの要素を暗示しない「非例示用法」がある。非例示用法は発話を柔らかく婉曲的にする機能を持つ。しかし、日本語教育において非例示用法は重要視されていないと言われている。したがって、本研究では、日本語教育に「たり」の非例示用法の重要性を示すために、話し言葉コーパスを用いて非例示用法の使用頻度と世代差を調査した。その結果、非例示用法は日本語母語話者に多用されており、若者言葉とは認められず、各世代に広がっていることが明らかになった。

C13(49).留学生と地域のつながりを築く日本語教材とは —ことばの学びを軸とした地域づくりを目指して—
金丸巧・譚明珠（東亜大学）

本研究では、留学生と地域のつながりを築くための日本語教材のあり方を考えた。それは、知識を一方的に押し付けるような教材ではなく、相互に変化し合うような教材である。筆者らが実施したアンケート及びインタビュー調査と、これまでに実施した実践の振り返りを通して、教材のコンセプトとして以下の三点を示した。(1)「自分ごとの日本語の学び」を生み出すこと、(2)「教え合う」「助け合う」関係性を生み出すこ

と、(3)「個人として認め合う」関係性を生み出すこと、である。このような教材を介して、ことばの学びを軸とした地域づくりが可能になるのではないかと考える。

C14(50).JSL 高校生を対象とした国語リライト教材の作成と授業実践

浜田かおり・斎藤里美・大津友美（東京外国語大学）

日本語支援が必要な JSL 児童生徒にとって、日本語への依存が高い国語科の学習は特に困難である。そこで近年、主に JSL 小中学生を対象として、リライト教材を使用した支援が広がりつつある。リライト教材は、表現は易しくても、学年相当の知的レベルに合った読み物を扱えるという利点がある。本研究では、今までほぼ対象とされてこなかった JSL 高校生に焦点を当てた。筆者らは 2020 年度以降、JSL 高校生を対象とした国語科の取り出し授業を行っており、高校生向けのリライト教材を作成し、それをを用いた実践を行っている。本研究では、今までの実践で得た成果 3 点と課題 2 点を報告し、今後必要な分析や検証について述べる。

C15(51).中国人学部生の大学院進学動機—中国の日本語専攻学部生のアンケート調査—

向坂卓也（外交学院）

2000 年以降、中国では大学院進学ブームが続き大学院への進学志望者が増加している。そして中国での大学院進学ブームを背景に、日本の大学院へ留学する中国人大学院生が増加しており、新型コロナウイルスの世界的な感染にも関わらず、日本の大学院に学位取得のために正規留学する中国人が増加し続けている。日本の大学院の人文科学、社会科学、芸術学の分野の正規大学院生のうち 20%以上が中国人留学生である。中国の大学で日本語を専攻とする学部生を対象としたアンケート調査結果から大学院進学志望者が多いこと、そして就職を目的とした実利志向の大学院進学志望者が多いことが分かった。

C16(52).発話の「感じのよさ」と流暢性 —発話速度・ポーズ・リペアの測定から—

篠原亜紀（国際交流基金日本語国際センター）

本稿は、コミュニケーションにおける発話の「感じのよさ」と流暢性の関係を探ったものである。2つの異なる場面（ストーリーテリング、依頼）での非母語話者 2 名の発話の流暢性を、「発話速度」「ポーズ」「リペア」を指標で測定したところ、ストーリーテリング場面では、無音ポーズやリペアが多いと、非流暢な印象を与え、「感じのよさ」にも影響することがわかった。一方で、依頼タスクで無音ポーズが少なすぎても印象がよくないことがわかった。また、フィラーの使用が好印象を与えることもあれば、多用すると印象が悪くなることから、「適度な」量のフィラーが「感じのよさ」につながることを示唆された。

C17(53).教育用 SNS を活用したデジタルストーリーテリング発表会の実践報告—動画コメント機能の有用性に着目して—

武田雅史(フリーランス)・佐藤蘭礼（東京国際大学）

Facebook や Twitter などのいわゆるソーシャルネットワークサービスは既に日常生活の一部となっており、教育現場も例外ではなくなっている。Flipgrid は教育用に開発された SNS で、テキストコメントに加え動画コメントを投稿できる機能が付いている。本稿はデジタルストーリーテリング発表会を Flipgrid の動画コメント機能を活用して実践した報告である。あくまでも教員側の主観的見解ではあるものの、動画コメントによる学習者間のやりとりは単なるテキストコメントに比べて意義があったと考える。今後はアンケート調査などを行い学習者の Flipgrid に対する意識や考え方などを深く掘り下げていきたい。

C18(54).複合動詞「～上げる／上がる」とベトナム語における対応表現との対照—日本文学作品とベトナム語訳版の考察—

ファム ティタインタオ（東京外国語大学大学院生）

本研究は文学作品における「～上げる／上がる」を含む文を抽出し、その作品のベトナム語訳版における「～上げる／上がる」を含む文の対応表現を考察するものである。結果として「立ち上がる」“*đứng lên*”（立つ＋上がる）や「持ち上げる」“*cầm lên*”（持つ＋上がる）のような「上昇」を表す「～上げる／上がる」は同様の「上昇」を表すベトナム語の“- *lên*”と対応している。一方、「完了」と「敬語」の意味用法では、対応表現が顕著に見られないが、「構図を作り上げる」“*đựng lên kịch bản*”（立てる＋上げる＋脚本）や「戦力を練り上げる」“*lên chiến lược*”（上げる＋戦略）の場合は複合パターン“- *lên*”または、単独動詞としての“- *lên*”と対応し、用いられていると考察できた。

●ラウンド D 14:10-15:10（発表件数 18 件）

D01(55).多様なフィールドへの理解を促す日本語教員養成の試み —企業を想定した日本語研修を考える—

大津友美（東京外国語大学）・工藤嘉名子（東京外国語大学）

筆者らは、学部生を対象とした日本語教員養成の一環として、多様なフィールドでの日本語教育への理解を深めることを目的としたタスク型授業を行った。「企業」というフィールドにおける日本語教育を授業で取り上げた際に、受講生に、日本語教師ではなく、先輩社員が外国出身の新人社員に対して通常業務の中で行える日本語研修を考案させることにした。本研究ではその授業実践について報告する。ある学生グループが実際に考案した「忘年会企画を通して学ぶ仕事と日本語」という研修プランを事例として取り上げ、職場での1) 仕事の熟練、2) 日本語の習得、3) 実現可能性、という3つの観点から、この研修プランについて考察する。

D02(56).「ポップカルチャー」をテーマにした留学生と日本人学生の協働学習の試み—留学生の振り返りアンケートからの考察—

浅井尚子（拓殖大学）

日本語を学ぶきっかけとして、日本のポップカルチャーを挙げる日本語学習者は多い。ポップカルチャーと日本語教育に関する研究や教材の開発も進んできている。本稿は、「ポップカルチャーで日本語を学ぶ」というテーマで学生自身に提案してもらうという教育実践を報告するものである。学生による発表・振り返りアンケートから、留学生と日本人学生の協働学習について、検討した。その結果、テーマ自体は、有効であることがわかったが、時間や通信方法・言語能力の差など、協働学習を行う上での課題も浮き彫りになった。

D03(57).ジェンダーの観点から見る日本語中上級教科書の分析と考察 —登場する実在人物と掲載コンテンツの作者に見られるジェンダー・バランスについて—

吉田沙織（恵泉女学園大学大学院生）

ジェンダー研究の観点から、日本語中上級の教科書について以下の事実を調査した。（1）教科書に登場する実在の人物の男女比（例：エジソン、徳川家康）（2）教科書に取り上げられている生のコンテンツの作者の男女比（例：『きまぐれロボット』 星新一、『鉄腕アトム』手塚治虫）（3）教科書の制作者の男女比 調査の結果、（1）登場する実在人物の84.5%が男性、（2）教科書内の生のコンテンツの作者の74.5%が男性、（3）教科書の制作者の73.3%が女性であることがわかった。日本語中上級教科書の内容が男性に偏っていることが示唆された一方、教科書の制作者は女性が多いというねじれが生じていることが明らかになった。

D04(58).華道を通して高次な思考を養うー「華道～自然を尊ぶ日本の心」(2021)による文化体験ー

山崎智子(東京福祉大学)

本発表では、日本の文化を学びながら日本語の運用能力を伸ばしていく授業に於いて、華道を取り上げた活動について報告する。「華道とは何か」ということを知り、「華道の精神」を理解することを学習目標として掲げ、理念や花の生け方について読んだ。その後で『Japan Video Topics』(外務省 2021)の中から「華道～自然を尊ぶ日本の心～」を視聴し、更に理解を深めていった。こうした活動を通して、具体的な表現から抽象的な表現を学んでいき、高次な思考を養っていくことが可能となる。またこのような活動は、一つの文化から別の世界へ繋がる取り組みともなるのである。

D05(59).日本語教員養成課程履修者による授業観察の視点の変化ー授業動画の視聴を通してー

栗原通世(国士舘大学)

本研究の目的は、模擬授業経験により養成課程を履修する大学生の授業観察の視点がどのように変化するかを明らかにすることである。履修者自身の模擬授業前後に、同じ初級日本語クラスの授業動画を視聴させた。その結果、授業観察の視点が初級日本語クラス進行に関する基礎知識と自らの外国語学習経験に基づくものから、模擬授業で見出した課題を踏まえたものへと拡大していることがわかった。観察内容は観察事象の表面的な記述からその背後にある教師の意図や学習効果の考察へと質的に変化していた。授業動画の視聴でも授業観察の訓練になるが、動画では十分に感じ取れない教室の雰囲気や学習者の反応に目を向けさせることが今後の課題である。

D06(60).断り場面における中国人日本語学習者の理由説明についてー口頭による談話完成テストを通してー

許明子(名古屋大学)・李嘉隆・謝カン月(名古屋大学大学院生)

本研究では、中国人日本語学習者 46 名を対象に、誘いに対してどのような理由で断るのかについて口頭による談話完成テストを行い、パーソナル・テリトリー(以下 PT)の概念に基づいて断る理由の内容について考察を行った。その結果、全体的には PT 外の理由が 81.4%で多く用いられており、PT 内の理由は 18.6%に留まっていることが明らかになった。「学会に行く」という誘いに対して PT 外の「学校の行事」が 59 例で最も多く、「ディベートに参加する」という誘いに対して PT 内の「能力・自信がない」が 27 例でやや多かった。また、2 回目の誘いに対する断り方として、詳しい説明を加えたり、繰り返したりする等の工夫が見られた。

D07(61).メタ認知の養成を目的とした内容重視科目「日本語学習のための心理学」

小林由子(北海道大学)

本研究は、学習者のメタ認知を養成することを目的とした上級日本語学習者対象の内容重視科目「日本語学習のための心理学」について、概要の紹介とこれまでの実践で得られた知見について検討することを目的とする。上級に達した学習者は日本語学習動機づけの低下を自覚する者が多く、学習不安を含めた情意的な側面について学ぶことが必要であることが明らかになった。また、学習継続のために、課題についてのメタ認知的知識として日本語のプロフィシエンシーを具体化し、方略についてのメタ認知的知識として記憶や技能について学ぶこと、および授業でのお互いの学習経験の共有が有効であることが示された。

D08(62).教室における自身の役割を意識化させるふりかえりの実践 ―ある留学生のふりかえりシートの記述から―

梶原彩子・内山喜代成（名古屋学院大学）

中級のクラスで、留学生が自身の役割をふりかえることで、教室参加の意味を意識化するというふりかえり活動を実施した。その結果、科目の特性や教室活動に合わせて、教室という社会とそこでの留学生の役割が変化していたことがわかった。教室における自らの役割の意識化を繰り返すことは、自身の新たな役割への気づき、責任の自覚や強化につながり、相対的、メタ的に自身がどのように教室という社会に参加しているかを理解するツールとしても活用できる可能性が示唆された。

D09(63).精読することが要約文にもたらす変化―要点把握の観点から―

劉芸寒（東京都立大学大学院生）

本研究では、中国人日本語学習者を対象に、同一のテキストに基づく精読前と精読後の要約文を要点把握の観点から比較した。その結果、精読前と比べ、精読後の要約文が「要点 IU」がわずかでありながら、多く残る傾向にあった。一方、文章構成の3区分が欠けることなく全て要約文に残るという点において効果が見られなかった。テキストの展開部の要点を過不足なく書き込むことの難しさと結尾部の欠落の問題が明らかになった。

D10(64).日本語ディクテーションサイト（D4E）の開発

佐藤礼子・榎原実香・小松翠・山元啓史（東京工業大学）

日本語初級学習者を対象に、会話パターンの習得とリスニング力の向上を目的としたディクテーション練習サイト（Dictation for Every Day; D4E）を開発した。1日10文3分程度のディクテーション練習を毎日継続的に行うオンラインシステムである。システムの開発・試行を行った結果、D4Eは自然なインプットを与えること、継続的な練習を実現すること、学習者自身による修正やエピソードの選択が可能であることがわかり、学習者が自習としてディクテーション練習ができる環境であることが確認された。

D11(65).「結果の存続」を表す「テイル」「テアル」の習得と問題点への一考察 ―中上級中国人学習者を対象に―

彭璽閣（横浜国立大学大学院生）

本研究は「結果の存続」を表す「テイル」「テアル」の学習における、中国人学習者の習得プロセス、及び「(ラ)レテイル」からの影響を考察したものである。アンケート、インタビューを通して、中級・上級中国人学習者の上記3文型の使用傾向を調査した。その結果、日本語レベル、アンケートの設問内容に関係なく、「テイル」「テアル」の相互の影響、「(ラ)レテイル」からの「テイル」「テアル」への影響があるとわかった。しかし、全体的な使用傾向からは、「テイル」の使用は中級・上級ともに安定しているが、「テアル」は、「テイル」による牽制、及び「(ラ)レテイル」との競合の影響を、上級になっても受けていることが明らかになった。

D12(66).作文クラスにおける創作を通じた自己表現

田中典子（名古屋大学）・近藤行人（名古屋外国語大学）

本稿では創作を取り入れた上級ライティングクラスでの実践を報告する。創作は、文学などの作品を独創的に作り出すこととされるオリジナリティをもった作品を自分のことばで伝える自己表現活動である。本実践では、出会った人物のストーリーを書くというテーマで、5週に渡り創作を取り入れた。授業内ではアイデアやプロットを他者に話す活動を通して、ふさわしいことばを探していった。学習者Aは3つの表現方法

で、兄、母、M教授の3人の人物のストーリーを書いた。Aは3作品から最も人に読んでほしいストーリーとしてM教授を選び、推敲と工夫を重ねた。このように作文クラスに創作を取り入れることで、自己表現の幅を広げることができた。

D13(67).ゼロ初級レベルにおけるタスク先行型授業の試み ―Edmodo を活用した TTT (Task-Teach-Task) 型授業の実践報告―

松下瑛里夏 (上智大学大学院生)

近年、タスク先行型の指導方法が注目されている(山内, 2015)。しかし中上級レベルの学習者に対する研究が多い一方で、初級レベルを対象とした研究は非常に少ない。そこで筆者は、ゼロ初級のクラスにおいてもTTT (Task-Teach-Task) の枠組みに沿った授業ができないかと考え実践を試みた。その結果、既有知識がほとんどないゼロ初級レベルにおいても、明確な場面設定と非言語情報や固有名詞のヒントがあればタスク先行型の授業を行うことは可能であり、ある程度の満足度も得られることが分かった。また、教室用 SNS ツールである Edmodo はタスクに活用できるだけでなく、学習者コミュニティの形成にも役立つことがあった。

D14(68).e-learning 教材を使用した無声・有声破裂音の聴取練習 ―中国語母語話者を対象として―

大久保雅子 (東京大学日本語教育センター)

本研究は、日本語音の聴取練習用 e-learning 教材を活用した無声・有声破裂音の練習方法を検討したものである。中国の大学で日本語を学ぶ学習者 10 名に本教材を使用した聴取練習を行ってもらい、そのデータを分析したところ、出題されている 50 語のうち誤答が多い語が明らかになった。また、一つの語に複数の無声・有声破裂音が含まれる場合には、様々な箇所を聴取混同していることがわかった。さらに、一度正解した音でも、次に聴取した際には誤答しているケースがあることが示され、練習を継続することの重要性が示唆された。

D15(69).オンラインの特性を生かした多読活動

俵山雄司 (名古屋大学)

オンラインの特性を生かした多読活動を初中級レベルの日本語クラスで実施した。第一の特徴として、紙媒体の利点であった選書時のパラパラ読みに替わるものとして、多くの表紙ページが一覧でき、ワンクリックでファイルが開けることを原則として、多読用の web サイトを選んだ。第二には、学習者の活動中の様子を観察可能にするため、大学の LMS 上の掲示板に書名ごとにスレッドを作成し、そこに読後の一言コメントを投稿してもらった。結果として、対面多読と同様の効果・反応が見られた一方で、学習者の活動中の様子の把握という面では課題が残った。

D16(70).日本語能力試験 N1 読解「問題 11」の練習問題を基に意見を書く ―「統合理解」から多角的視点を獲得し、新たな発想を創出する試み―

萩原幸司 (名城大学)

本発表では、日本語能力試験 N1 読解「問題 11」の練習問題に於いて提示された、同一テーマに関する 2 つの意見を基に、自分の意見を書く実践について報告する。「問題 11」は、「複数のテキストを読み比べて、情報を比較・統合しながら理解できるかを問う」「統合理解」であるが、本実践では、先ず、学生は 2 つのテキストから重要と思われる部分を抜き出し、その作業を通して、当該テーマに関する自分の立場とその根拠を明確にする。更に、自分の立場の欠点及び自分と異なる立場の美点を書き出していく。最終的には、多角

的視点から新たな発想を創出し、それを含め、書き出したことを全て材料として、自分の意見を構築するのである。

D17(71).上級日本語コースにおける翻訳の可能性 ―アカデミック・ライティング指導への応用に向けて―
相場いぶき（国際基督教大学）

本稿では、日本語上級コースにおける文学作品を用いた翻訳プロジェクトについて報告する。第1ステップとして、学習者は牧野（2018）が示した8つのポイントに基づき、翻訳で失われるものについての知識を得る。第2ステップでは、それぞれの言語で書かれた2冊の絵本を比較することで、日本語と英語がどのように異なるかを確認する。第3ステップは、小説の1ページを翻訳し、学習者が第1ステップで学んだ8つのポイントをどのように活用したかを説明する。この活動を踏まえ、本稿ではさらに、牧野が提案したポイントが今後のアカデミック・ライティング指導にも生かされる可能性について考察する。

D18(72). 中国人学習者の日本語会話における誤用について

張彤（大連科技学院）

中国人の日本語学習者が日本語で会話する時、ある一定の傾向が表れるようだ。それは、母語の干渉によるものだったり文化的な背景によるものだったりする。そしてそのような誤用や不自然な表現は、聞き手に誤解されるかもしれない。会話を指導する際、文法や語彙の知識を運用できるよう導くことはもちろん大切だが、イントネーションや話し方、非言語的な要素等の重要性を理解させ、より自然な日本語表現ができるように導くことが重要だと思う。ここでは、彼らの多くに共通する誤用を集め、その原因を探り、誤用が定着しないためにできることを考察してみたい。

【会費納入のお願い】

JLEMでは4月から翌年3月までを会計年度としております。2021年度会費（3,000円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#jlem-sg.org（#は@です）までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】（1）郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

（2）銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通（または貯蓄）※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会